

「文禄慶長の役」呼称の再検討

川 西 裕 也

はじめに

16世紀末、豊臣秀吉が起こした朝鮮侵攻の戦争（以下、「当該戦争」と称す）は、前近代東アジア史の一大画期となる事件であった。当該戦争については、「文禄慶長の役」「朝鮮役」「壬辰戦争」「壬辰倭乱」「万暦朝鮮の役」など、様々な呼び方がなされている。ここで試みに、2000年以降に日本で発表された歴史学研究的論著をいくつか選び、その中で使用されている当該戦争の呼称を整理してみれば、【表1】のとおりである。

【表1】日本の歴史学研究（2000年以降）の論著における当該戦争の呼称

当該戦争の呼称 ¹	出典
文禄慶長の役	太田秀春2001・2002、桑野栄治2010、佐島顕子2013、津野倫明2002・2020、中野等2008・2010a・2010b・2020・2021、荷見守義2006、米谷均2016、六反田豊2005、李啓煌2014、張子平2016
朝鮮の役	太田秀春2006・2008・2010、三鬼清一郎2000
唐入り	中野等2014a、堀新2010・2019、光成準治2020
壬辰倭乱	北島万次2005・2009、黒田慶一編2004、鈴木開2011、仲尾宏2000、村井章介2013、山内民博2003
壬辰丁酉（文禄慶長）乱	長森美信2020
壬辰戦争	荒木和憲2019、大野晃嗣2019、君島和彦2020、貫井正之2010、深谷克己2011、顧明源2020
万暦朝鮮の役	木村可奈子2010、久芳崇2010、荷見守義2019、鄭潔西2008・2009
朝鮮出兵	佐島顕子2016、曾根勇二2004、高橋亨2015、津野倫明2007・2014・2018、中野等2014b、平川新2018、三鬼清一郎2012
朝鮮侵略	池享編2003、北島万次2002・2012・2017、米谷均2005・2008
大陸侵攻	中野等2006

各専門分野における当該戦争の呼称の傾向を見てみれば、日本史では「文禄慶長の役」、朝鮮史では「壬辰倭乱」、中国史では「万暦朝鮮の役」が使用されることが多い。また日本史では、「朝鮮出兵」や「朝鮮侵略」など、日本軍の行為に着目した呼称もしばしば使われている。最近では、専門分野を問わず、若手研究者を中心に「壬辰戦争」という呼称も使用されるようになってきている。

当該戦争に関する国際共同研究が増加している昨今、呼称の乱立は無用な混乱と摩擦を招く

¹ 各論著において複数の呼称が用いられている場合には、煩瑣を避けるため、題目・章題など、もっとも目に付く呼称に限って挙げた（各論著に付された鉤括弧や括弧内の呼称は原則として省略）。そのため、表中の「当該戦争の呼称」は、呼称に対する著者の考えを必ずしも正確に反映していないことをお断りしておく。後掲の【表2】【表3】も同じ。

可能性がある。そのため、日本史や朝鮮史といった専門分野の枠を越え、歴史学界全体で当該戦争の呼称の共有化を試みることは重要な意味をもつと思われる。その際には、一国史的立場を越えた世界史的観点から、当該戦争の呼称を模索しなければならないだろう。太田秀春が「この戦争に関する新たな研究の展開のためには、近代以降の概念やそれぞれの立場から脱却したフラットな視線や呼称が必要である」（太田秀春2010、241頁）と提唱するように、今後、当該戦争の研究を推進するにあたっては、より適切な呼称についても広く議論し検討を重ねることが求められる。

さて、現在の日本の歴史概説書で、もっとも一般的に使用されている当該戦争の呼称は「文禄慶長の役」といえる。この呼称がいつどのようにして日本で広まっていったのかという点について、東洋史研究者の石原道博は次のように述べている（石原道博1963、21頁）。

……同（明治－引用者注）四十三年（一九一〇）の日韓合併が実現されると、……これまで敵視していた朝鮮人が、日本の同胞ということになったのであるから、すくなくとも朝鮮人にたいしては、表面上、朝鮮役を通じて不必要な刺激をあたえぬ配慮がなされた。朝鮮征伐という表現もやめて、文禄慶長の役ということになった。いいかえると、日本人のあたまのなかには、（二）としての理解（膺懲の師・正義の戦・義戦・聖戦として当該戦争を捉えようとする、明治時代以来の理解－引用者注）がいぜんとして存続しながら、日韓合併という事実をまえにして、呼称上の臨機的改変や、観念上の形式的調整によって、一時を弥縫し糊塗したものといえよう。²

石原によれば、1910年8月の韓国併合を契機として、朝鮮人への不必要な刺激を避けるという「配慮」のもと、「朝鮮征伐」に代わって「文禄慶長の役」呼称が使用されるようになったという³。そして、この呼称の変化は、当時の日本人が心中では当該戦争を「膺懲の師」や「正義の戦」として捉えているにもかかわらず、これを一時的に覆い隠そうとした弥縫策にすぎないと批判した。

また、当該戦争研究の第一人者である北島万次は、2005年の第1次日韓歴史共同委員会における討論で次のように発言している（鄭求福2005、511～512頁）。

石原道博という人がいて、「文禄・慶長の役」塙書房、刊行の年次はちょっと忘れちゃったけれども、私の本には書いてあります。この中で呼称が「朝鮮征伐」から「文禄慶長の役」になぜ変わったかという問題がある。それは要するに、韓国併合、石原さんはこれを契機にして朝鮮人も日本人になったのだから、征伐という言葉はやめようということになった。このように石原さんはいっています。池内先生が「文禄慶長の役」という名称を用いたのは、これらの風潮から来たんだと思います。こういう考えの中からこの文禄慶長の役と一般的になったので、池内先生はそういうように名付けたと思うんです。

北島は石原の説を引きつつ、韓国併合を機に当該戦争の呼称が「朝鮮征伐」から「文禄慶長

² 引用文中の……は省略、／は改行箇所を意味する。なお読者の便宜のため、句読点が付されていない文章は句読点を補い、読点のみの文章は読点を句点に改めた箇所がある。以下同。

³ 石原は当該戦争の呼称を分類・列挙しているが、「文禄慶長の役」呼称の初出事例として池内宏『文禄慶長の役』を挙げている（石原道博1963、18頁）。

の役」へと変わったと述べる。そして、当該戦争研究をかつて牽引した池内宏も、そうした風潮の中で「文禄慶長の役」呼称を使用するようになった、という。その他、「文禄慶長の役」呼称が韓国併合に起因するという見解は〔金文子1999〕⁴や〔六反田豊ほか2005〕⁵でも見られる。

確かに、「文禄慶長の役」という呼称は韓国併合後に広く普及したようだが（後述）、「文禄慶長朝鮮役」や「文禄の役」（ここでは当該戦争全体の呼称を指す）など、「文禄慶長の役」に類する呼称は併合前からすでに使用されていた。したがって、韓国併合を契機として朝鮮人への「配慮」から「文禄慶長の役」呼称が使用されるようになったという先行学説には再検討の余地があると思われる。そこで本稿では、「文禄慶長の役」呼称が1945年以前の日本で普及することになった経緯と要因について検討を加えることにしたい⁶。

石原や北島の説を一瞥する限り、「文禄慶長の役」は、韓国併合後、植民地の朝鮮人の心情を刺激する不穏当な呼称（「朝鮮征伐」や「征韓」）に代わって使用されるようになった、いわゆるポリティカル・コレクトネスに則った呼称であるかのように思われる⁷。こうした理解は、現在でも一部の研究者の間で広まっているようだが、「文禄慶長の役」呼称をそのように捉えることが妥当なのかどうか、慎重に見極める必要があるだろう。

本稿の構成は次の通りである。第1章では、「内地」（日本本土）における当該戦争の呼称を検討するのに先立ち、まずは植民地朝鮮の研究・教育分野で当該戦争がどのように呼ばれていたのかを窺う。ついで第2章では、1945年以前、「内地」の研究・教育分野における当該戦争の呼称について取りあげる。池内宏や中村栄孝など、当該戦争研究を主導した研究者の論著を分析し、なぜ彼らが「朝鮮征伐」や「征韓」でなく、「文禄慶長の役」呼称（あるいはそれに類する呼称）を選択したのかを考察する。最後に、当該戦争の呼称の普及に重要な役割を果たしたと考えられる日本史教科書について検討を加える。1945年以前の日本史教科書の記述で、当該戦争の呼称がどのように変化していったのかを跡づけることにしたい。

1、植民地朝鮮における当該戦争の呼称

1910年8月の韓国併合後、植民地朝鮮における研究・教育分野では当該戦争に対していかなる呼称が用いられていたのだろうか。朝鮮総督府や総督府官僚、朝鮮の学校教員が執筆・編集した著書から当該戦争の呼称を刊行年順に例示してみれば、【表2】のとおりである。

⁴ 「……1910年以後には、韓日併合により朝鮮人も日本の同胞となったため、「朝鮮征伐」という名称の代わりに「文禄慶長の役」という表現を使いはじめた」（313頁、原文朝鮮語）。特に参考文献は挙げられていないが、石原の著書が参照されていることは明らかだろう。

⁵ 「……1910年、韓国併合によって朝鮮人を同胞と見なすようになったことから、「朝鮮征伐」の表現は避けられ、かわって第一次出兵（1592～93年）を「文禄の役」、第二次出兵（1597～98年）を「慶長の役」、総じて「文禄・慶長の役」という呼称が定着した」（27～28頁）とし、石原の論著を参考文献として挙げている。なお、当該部分を記述したのは北島である（鄭求福2005、512頁）。

⁶ 1945年以前における当該戦争の研究史については〔北島万次1990〕が詳細に論じているが、呼称に関する言及は乏しい。

⁷ 念のために付け加えておけば、北島は「文禄慶長の役」呼称に批判的であり、自身の論著ではこの呼称をほとんど使用していない。

【表2】 朝鮮総督府関係者の著書における当該戦争の呼称⁸

当該戦争の呼称	出典	備考
壬辰乱	『新撰大日本帝国史略』（三国谷校 関・日韓書房編輯部編1913）	朝鮮総督府の検定を通過した中等学 校用の日本史教科書
文禄慶長の役（壬辰乱）	『外国歴史教科書』（朝鮮総督府編 1914）	中等学校用の外国史教科書
壬辰の乱	『尋常小学国史補充教材 児童用』（朝 鮮総督府編1921）	普通学校で日本史を教授する際の補 助教材
文禄役	『朝鮮文化史研究』（稲葉岩吉1925）	著者は朝鮮総督府中枢院調査課嘱託
壬辰役（文禄の役・慶長の役）	『朝鮮史大系』（瀬野馬熊1927）	著者は朝鮮史編修会嘱託
壬辰丁酉の乱	『朝鮮史要』（大原利武1929）	著者は朝鮮総督府中枢院調査課嘱託
朝鮮役	『日鮮関係の史的考察と其の研究』 （日笠護1930）	著者は京城師範学校教諭
壬辰・丁酉の乱	『朝鮮小史』（小田省吾1931）	著者は京城帝国大学教授
壬辰役	『世界歴史大系11 朝鮮・満洲史』（稲 葉岩吉・矢田仁一1935）	著者（稲葉岩吉）は朝鮮史編修会修 史官
壬辰・丁酉（文禄・慶長）役	『朝鮮史の栞』（今西龍1935）	著者は京城帝国大学教授
文禄・慶長の役	『岩波講座日本歴史 文禄・慶長の役』 （中村栄孝1935）	著者は朝鮮史編修会修史官
文禄・慶長の役	『朝鮮史のしるべ』（朝鮮総督府編 1936）	朝鮮総督府の施政25周年を記念して 作成された小冊子
朝鮮出兵	『普通学校国史解説』（北川清之助 1936）	著者は元普通学校長
壬辰・丁酉の乱	『概観朝鮮史』（宮崎五十騎1937）	著者は京城師範学校教諭
文禄慶長の役	『初等国史』（朝鮮総督府編1938）	尋常小学校用の日本史教科書
文禄慶長の役	『国史地理』（朝鮮総督府編1939）	4年制尋常小学校用の地理歴史教科書
文禄慶長の役	『初等国史』（朝鮮総督府編1941）	国民学校用の日本史教科書
文禄の役、慶長の役	『中等国史』（朝鮮総督府編1942）	中等学校用の日本史教科書
文禄慶長の役	『初等国史』（朝鮮総督府編1944）	国民学校用の日本史教科書

本表を見れば明らかなように、朝鮮総督府関係者の著書では、「文禄慶長の役」あるいは「壬辰乱」などを使用し、「朝鮮征伐」や「征韓」呼称を避けていることがわかる⁹。

「朝鮮征伐」や「征韓」呼称の使用を避けることについては、朝鮮総督府の内部で一定の方針が存在したものと考えられる。次に掲げたのは、併合から2ヶ月後の1910年10月、朝鮮総督府内務部学務局が制定し各学校に配布した教育上の注意事項である（朝鮮総督府内務部学務局1910¹⁰、14～15頁）。

⁸ 著書の検索にあたっては〔末松和保編1970〕を参考とした。なお、『外国歴史教科書』や『初等国史』など、朝鮮総督府が編纂した歴史教科書については〔張信編2005〕所掲影印を参照した。

⁹ 紙幅の都合上、ここでは著書のみ取りあげたが、論文についても著書と同様の傾向を見て取ることができる。〔末松和保編1972〕135～140頁参照。

¹⁰ 〔渡部学・阿部洋編1990〕所掲影印を参照した。

歴史地理等ノ書中ニ、昔時倭寇ト称セシ日本辺民ノ朝鮮侵略、蒙古及高麗ノ日本入寇並ニ壬辰乱（文禄慶長ノ役）ノ記事等ヲ多少記載スルモノアリ。此等ノ教材ヲ教授スル場合ニ於テ教授者ハ最モ慎重ノ注意ヲ以テ^{〔シ〕}、決シテ誇張ノ言辞ヲ用ヒ杜撰ノ事項ヲ教フル等ノコト有ルベカザルハ勿論、被教育者ノ種類学年等ニ応シ、歴史又ハ地理ノ教授トシテ必要止ムヲ得ザル範圍ニ止メ、徒ラニ内地人朝鮮人間ノ感情ヲ害スルニ過ギサルガ如キ事項ハ之ヲ教授スルヲ避ケベシ。

普通学校¹¹（朝鮮人児童を対象とした公立の初等教育機関）で、「元寇」「倭寇」、そして当該戦争を教授する際、慎重な注意を払うことを要請し、朝鮮人と「内地」人との間の感情を悪化させかねない「誇張ノ言辞」や「杜撰ノ事項」の教授を禁止している。併合からしばらくの間、普通学校には歴史の授業が存在しなかったが、国語読本の教材で日本史に触れることがあり、そうした際に朝鮮人児童への「配慮」が求められたのだろう。当該戦争の呼称に関しても、朝鮮人児童を刺激する「朝鮮征伐」や「征韓」の使用は避けられたものと推測される。

その後、1920年には、普通学校の修業年限が6年に延長されるのにもない¹²、日本史の授業が開始されることになった。その教科書として、1921年から22年にかけて、朝鮮総督府によって『普通学校国史』が編纂された。しかし、本教科書は「内地」中心の記述が目立ち、朝鮮人からの評判が悪いため、数年後、大幅に改訂されることになった。次に掲げたのは、この教科書改訂に関する新聞報道である（『毎日申報』1928年10月27日1面「普通学校歴史は朝鮮本位に改訂、今年以内に編纂して明春から使用」、原文朝鮮語）。

普通学校用新教科書は目下、総督府学務局で改訂編纂中であるが、……学務当局で第一慎重に考慮するのは歴史教科書の編纂であるが、現在の歴史教科書はその精神が内地歴史を本位としたものであるため、該教科書中には朝鮮征伐云々の文句があり、教授上児童に非常に不快な感情を与えるため、今般これを明鮮本位^{〔朝〕}に改訂すると同時に、その文体を平易な口語体に変更するとのことである。

現行の教科書では「内地」歴史を本位とし、教科書中には「朝鮮征伐」云々の語があり、朝鮮人児童に不快な感情を与えるため、新教科書では朝鮮本位に改訂することになった、とある。当時使用されていた『普通学校国史』（朝鮮総督府編1922）には「朝鮮征伐」の語は見えないため、上記の記事は必ずしも正確なものではない。ただ、「朝鮮征伐」という語が朝鮮人児童に「非常に不快な感情を与える」という指摘は、植民地朝鮮において当該戦争の呼称に強い注意が払われていたことを物語っている¹³。

¹¹ 普通学校は、1938年に小学校、1941年に国民学校と改称された。なお、植民地朝鮮の教育制度の概略については〔森田芳夫1987〕参照。

¹² ただし、土地の事情により、5年または4年の修業年限に短縮する普通学校もあった。

¹³ 『普通学校国史』（朝鮮総督府編1922）には「朝鮮征伐」という呼称そのものは見えないが、「……明我が求に應ぜざるにより、秀吉は道を朝鮮にかりて之を伐たんとせしが、朝鮮は明を恐れて従はざりき。／こゝに於て秀吉、朝鮮を定めて明に及ばんとし、……肥前の名古屋（ママ）におもむきて諸軍を指図せり」とあり、秀吉の命令を聴かない朝鮮を討つという形で当該戦争が記述されている。その後、新たに編纂された『普通学校国史』（朝鮮総督府編1933）では、「……朝鮮は修好を承諾せず、また明へ案内することをも拒みました。／そこで秀吉は已むを得ず、道を朝鮮にとり、行軍を妨げるも

そもそも「征伐」とは、「礼」の実践の一環として、「天子が命令に従わない臣下を伐つ」という行為であった（『春秋左氏伝』莊公23年）。朝鮮人にとって、秀吉を天子に、朝鮮を逆臣になぞらえた「朝鮮征伐」という語が心情をいかに刺激するものであったのか、想像に難くないだろう。

植民地朝鮮の学校教育における当該戦争の取扱いに関しては、元普通学校長の北川清之助によって普通学校の教員向けに執筆された、日本史教授の解説書が注目に値する（北川清之助1936、27～28頁）。

秀吉の朝鮮出兵について、秀吉の征明軍を起して朝鮮へ兵を出した事は最も近代史上に於ける内鮮感情の面白からぬ材料の最大なものである。／……此の課は国史取扱上最も困難な課である。即ち若し教授者に於て此の点について主観が確立せず不徹底であつたならば、何れの学級にも必ず児童中数名の者は我が国史を疑ひ且つ此の役について非常なる悪感情を先入的に持つものあり、為めに国史教育の全般に涉つて迄も疑ひを深からしめる様の事に陥らないとも限らない。注意して頂きたい。

北川は、当該戦争は「内鮮感情の面白からぬ材料の最大なもの」と指摘する。そして、「内鮮感情」配慮の観点から、朝鮮人児童に対して当該戦争を教授する際に慎重を期すことを教員に強く要請した。学校教育の現場においても、当該戦争を教授するにあたっては相当な注意が払われていたことが見て取れる。

このように朝鮮総督府関係者は、教育上、「内鮮融和」の障害となり得る事項に強い注意を払っていた。教育と不可分の関係にある研究の分野でも事情は同様だろう。彼らが編纂・執筆に関与する著書で、朝鮮人を刺激する「朝鮮征伐」や「征韓」呼称を避けたのは当然のことと言える。「朝鮮征伐」や「征韓」に代わる呼称として主に使用されたのが、「文禄慶長の役」あるいは「壬辰乱」¹⁴であった。この中、「文禄慶長の役」は、当時の「内地」の研究・教育分野でしばしば使用された呼称であったため（後述）、朝鮮総督府関係者もこれを用いたものと考えられる。以上のことから、植民地朝鮮の研究・教育分野において、「文禄慶長の役」という呼称は、石原道博や北島万次の説くように、朝鮮人に対する「配慮」のもとに使用されていたと捉えることができる¹⁵。ただし、その「配慮」は植民地統治の円滑化という目的に基づくものであったことは言うまでもない。

それでは、「内地」における「文禄慶長の役」呼称についても、朝鮮人に「不必要な刺激をあたえぬ配慮」に基づいて使用され普及するようになったと見てよいのだろうか。この問題に

のを打ち破つて明に向はうと決心し、……大軍を渡らせました」と若干和らげた表現を用いるようになっている。なお、『毎日申報』記事にいう「朝鮮征伐」が、いわゆる神功皇后の「三韓征伐」「新羅征伐」を指す可能性もあるが、『普通学校国史』（朝鮮総督府編1922）の当該箇所には「征伐」という語は見えない。通常、「朝鮮征伐」は当該戦争を指す語であるため、『毎日申報』記事にいう「朝鮮征伐」も当該戦争を意味すると考えられる。

¹⁴ 朝鮮において当該戦争は通常「壬辰倭乱」と称されているが、日本に対する蔑称としても使用された「倭」字を除いて「壬辰乱」と称している点に、「内鮮感情」悪化を忌避しようとする朝鮮総督府関係者の意識を垣間見ることができる。

¹⁵ なお「朝鮮征伐」や「征韓」という呼称は、植民地朝鮮で刊行された民間の著書・雑誌や新聞記事でしばしば使用されていることからわかるように（清家彩果1912など）、朝鮮総督府によって禁句とされたわけではない。あくまで朝鮮総督府が関与する研究・教育の場合においてのみ、その使用が規制されたものと考えられる。

については次章で検討することにしたい。

2、「内地」における当該戦争の呼称

(1) 当該戦争の多様な呼称

豊臣政権期から江戸時代にかけての日本では、当該戦争は「高麗陣」「朝鮮陣」「朝鮮征伐」「征韓」などと称されていた（石原道博1963、16～19頁）。江戸時代が終焉を迎えた後、明治年間から1945年まで、研究や教育に携わる者（あるいはそれに類する者）が執筆した著書に見える当該戦争の呼称について整理すれば、【表3】のとおりである。なお、当該戦争に関する論文や雑記・随筆類までをも分析するとなると事例数が膨大となるため、それらについては検討の対象から除外した。もとより事例網羅的なものではないが、これによって当該戦争の呼称に関する大まかな傾向を窺うことはできるだろう。

【表3】明治年間～1945年の著書における当該戦争の呼称¹⁶

当該戦争の呼称	出典
征韓、征韓の役	『稿本国史眼』（重野安繹・久米邦武・星野恒1890）
	『豊太閤征韓秘録』（松本愛重編1894）
	『日韓交通史』（服部徹1894）
	『海の大日本史』（谷信次1903）
	『英和对訳豊太閤征韓史』（ダブリュー＝ジー＝アストン1907） ＊原題は「HIDEYOSHI'S INVASION OF KOREA」
支那朝鮮征伐	『海外交通史話』（辻善之助1917）
朝鮮征伐	『豊臣時代史』（田中義成1925）
	『綜合日本史大系8 安土桃山時代史』（花見朔巳1929）
	『異説日本史12下 戦争篇下』（雄山閣編輯局編1932）
	『日本精神講座』（佐藤義亮編1934）
	『皇国二千六百年史講話』（帝都日日新聞社編1940）
朝鮮役	『近世日本国民史 朝鮮役』（徳富猪一郎1921・22）
	『軍事的批判豊太閤朝鮮役』（杉村勇次郎1922）
	『日本戦史 朝鮮役』（参謀本部編1924）
	『日本史の研究』（三浦周行1930）
	『鉄砲伝来記』（洞富雄1939）
	『朝鮮役水軍史』（有馬成甫1942）
豊太閤征外	『豊太閤征外新史』（木下真弘1893）
文禄慶長朝鮮役	『文禄慶長朝鮮役』（北豊山人1894）
文禄の役	『弘安文禄征戦偉績』（史学会編1905）
文禄慶長の外征	『日本史講話』（萩野由之1920）

¹⁶ 著書の検索にあたっては、国立国会図書館デジタルコレクションおよび中野2014b掲載の文献目録を参考とした。

文禄慶長の役	『文禄慶長の役』正編第1（池内宏1914）
	『岩波講座日本歴史 文禄・慶長の役』（中村栄孝1935）
	『文禄慶長の役』別編第1（池内宏1936）
	『新興日本の国防』（有馬寛1936）
	『日本歴史概説』（川上多助1940）
	『新講大日本史5 室町安土桃山時代史』（田中久夫1943）
	『国史概説』（文部省編1943）

当該戦争の呼称の中、「征韓」は江戸時代から使用されていた呼称である（川口長孺『征韓偉略』など）。ただ、明治初期に提起された「征韓論」との混同を避けるためか、時代が下るにつれ、「征韓」呼称の使用例は次第に少なくなっている。

「朝鮮征伐」呼称もまた江戸時代から使用されていた（堀正意『朝鮮征伐記』など）。明治以降には一般向けの著作を中心として頻繁に用いられ、第二次世界大戦後にもその使用が長く続いた。例えば、1955年初版の『広辞苑』（岩波書店）には「朝鮮征伐」という項目が立てられており、1976年の第2版補訂版に至って項目名が「朝鮮出兵」と変更されている。ただし、同項目には「日本では朝鮮征伐と呼んだ」という記述が第6版（2008年）まで掲載され続け、現在通行している第7版（2018年）でようやく「朝鮮征伐」という語が消滅した。「朝鮮征伐」がいかに人口に膾炙した呼称であったのかがわかる。

そのほか、当該戦争の通史として多数の読者を獲得した『近世日本国民史 朝鮮役』（徳富猪一郎1921・22）や『日本戦史 朝鮮役』（参謀本部編1924）の影響からか、「朝鮮役」呼称の使用も少なくない。なお『日本戦史 朝鮮役』の場合、戦地名を採って「朝鮮役」と名付けたとしている（凡例1頁）。

本稿の検討対象は「文禄慶長の役」呼称である。本呼称がいつ頃から用いられていたのか正確な時期は明らかでないが、韓国併合後にその使用事例が多数確認されるようになる。ただ、『文禄慶長朝鮮役』（北豊山人1894）のタイトルに「文禄慶長朝鮮役」、『弘安文禄征戦偉績¹⁷』（史学会編1905）所収の各論文の題目に「文禄の役」（ここでは当該戦争全体を指す呼称として使用）とあるように、韓国併合前から「文禄慶長の役」に類する呼称はすでに用いられていた。そのため、韓国併合と「文禄慶長の役」呼称の使用・普及とを安易に結びつけることはできないものと思われる。節を改めてこの点を詳しく検討することにしよう。

(2) 「文禄慶長の役」呼称の使用と普及

本節で、1945年以前における「文禄慶長の役」呼称の使用と普及の状況について検討するに

¹⁷ 本書所収の論文を当該戦争関連のものに限って挙げれば、次のとおりである。星野恒「豊太閤画像に就て」、田中義成「豊太閤が外征の大目的を示したる文書」、岡田正之「文禄役に於ける我が戦闘力」、三浦周行「豊太閤の軍律」、辻善之助「安国寺恵瓊の書簡の一節」、鈴木円二「蔚山籠城情況」、藤田明「豊太閤所持と伝へらるゝ扇面及び文禄役に用ゐられたる地図」、村上直次郎「豊臣秀吉フィリピン諸島并に台湾の入貢を促す」、三上参次「文禄役に於ける講和条件」、八代国治「文禄役に於ける俘虜の待遇」、芝葛盛「文禄役に於ける占領地収税の一斑」、山県昌蔵「文禄役の虎狩」、平出鑑二郎「文禄役の我が工芸に及ぼせる影響」、黑板勝美「高野山朝鮮陣の供養碑」。なお、[石原道博1963]は本書を「征戦」呼称の事例と分類しているが（18頁）、本書の各章では当該戦争の呼称として「文禄の役」が主に使用されている。「征戦」は「弘安の役」「文禄の役」の両役にかかる一般名詞と捉えるべきだろう。

あたり、同呼称の最古の類例と見られる北豊山人の著書、また、当該戦争に関する実証的な研究であり、以後の研究・教育に強い影響を与えた、史学会・池内宏・中村栄孝の論著に特に注目したい。彼らが当該戦争の呼称として、「朝鮮征伐」や「征韓」ではなく、「文禄慶長の役」（あるいはそれに類した呼称）を選択した理由は何だったのだろうか。

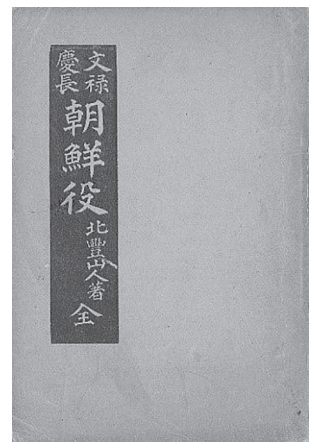
まず、北豊山人の『文禄慶長朝鮮役』（北豊山人1894）から見ていこう。北豊山人なる人物が何者であるのか、これまで明らかとされてこなかった¹⁸。しかし、参謀本部編纂課員・陸軍大学教授の横井忠直の追悼詩文集『孔昭集』（1918年、弘前市立図書館蔵）に、彼の著書として、「別ニ文禄慶長朝鮮役及ビ小笠の光等ノ著アリ」（桑原虎治「横井先生逸事」、9頁）と記されていることから、北豊山人の正体が横井忠直と判明した¹⁹。横井は参謀本部の『日本戦史』シリーズの編纂に携わり、また『高句麗古碑考』を著して広開土王碑研究に足跡を残した人物として著名である（佐伯有清1976）。

『文禄慶長朝鮮役』の緒言および凡例によれば、日清戦争が勃発すると「少壮子弟」から「文慶ノ役」についての質問を受けることが頻繁になったため、『豊太閤征外新史』の著者・木下真弘から多くの史料を借り受けて本書を著した、という。横井は当該戦争の呼称選択の理由を次のように述べている（凡例1頁）。

朝鮮役、旧ト朝鮮陣ト称シ、又高麗陣ト称ス。猶ホ薩摩陣・小田原陣ト称スルカコトシ。今更メテ朝鮮役ト為ス。亦、山崎役・関原役ノ例ナリ。旧史、或ハ征韓役ト称ス。然レトモ此役、固ト征明ヲ主トス。其朝鮮ニ戦ヒシハ途次ノ随伴事件ノミ。故ニ肯テ征韓ノ名ヲ採ラス。然ラハ則チ征明ト命ケムカ。未タ明国ニ入ラサルヲ奈ンセン。因テ山崎・関原等ノ例ニ従ヒ戦地ヲ以テ命名ス。

当該戦争はもともと「征韓役」と称されていたが、戦争の目的は「征明」であり、朝鮮での戦いは随伴の事件にすぎないため、「征韓」呼称は不適當である。とはいえ、日本軍は明に入っていないので、「征明」呼称も適當でない。したがって戦地名を採って「朝鮮役」とした、という。

本書の表紙や内題を見てみると、書名の「文禄慶長朝鮮役」の中、「文禄」および「慶長」が小字双行で記されている（【図1】参照）。また、上の引用文からも見て取れるように、横井は当該戦争の呼称として「朝鮮役」に重点を置いていたようである。しかし、「朝鮮役」だけでは、当時、朝鮮半島が戦地となっていた甲午農民戦争や日清戦争と区別がつかないため、小字双行で年号を付したものと思われる。「文禄」「慶長」の両年号を冠した著書



【図1】『文禄慶長朝鮮役』（筆者蔵）表紙

¹⁸ [菅野銀八1925]は北豊山人を長尾影弼（博聞堂社長）と見なしているが（88頁）、その根拠は明らかでない。おそらく、『文禄慶長朝鮮役』の奥書に「印刷兼発行者」として長尾の名があることから、そのように推測したにすぎないと思われる。

¹⁹ 北豊山人の正体および『孔昭集』については、井上泰至氏（防衛大学校）のご教示を賜った。ここに記して感謝申し上げる。なお、『近世日本国民史朝鮮役史料展覧会 陳列書籍解題』（国民新聞社、1922年）にも、『文禄慶長朝鮮役』の「著者北豊山人は参謀本部の編修官故横井忠直なり」（44頁）とある。

は本書が嚆矢であり、後続の研究における当該戦争の呼称に一定の影響を及ぼしたことが推測される。

なお横井が、当該戦争の呼称として「征韓」を避けたのは、秀吉の目的が「征明」にあったためと述べている点は注目に値する。これは横井の創見というわけではなく、彼が著述にあたって多分に参照した、木下の『豊太閤征外新史』の中ですでに言及されている。木下は、「豊太閤は大軍を海外に発したが、世にこれを「朝鮮の役」という。しかし、その実際は、朝鮮を討つのではなく、明を討つところにあった。明を討ち、それによって国威を西南諸国に伸展させようとしたのである」（巻5、原文漢文）と述べ、「征明」こそが秀吉の目的であったことを指摘した。木下が「朝鮮」という地名を避けて「豊太閤征外」を当該戦争の呼称とした理由は、ここにあるのだろう。年号と戦地名を合わせて「文禄慶長朝鮮役」と名付けた横井とは異なる表現だが、秀吉の目的を重視して当該戦争の呼称を再考するという、両者の発想は共通している。

次に、史学会が編纂した『弘安文禄征戦偉績』（史学会編1905）について検討したい。本書は、東京帝国大学史料編纂掛の史料展覧会で陳列された「弘安の役」「文禄の役」関連の諸史料をもとに執筆された論文集である。

本書は日露戦争の最中に刊行されたが、その冒頭で史学会長の重野安繹が、「吾朝外国征戦の事、初に神後の征戦あり。次に阿部比羅夫の北征、田村磨の撃攘あり。近世に至り、弘安文禄の役あり。毎戦国威宣揚、永く外侮を絶ち、金甌無欠の皇基を建て以て今日に至れり」（緒言1頁）と述べている。ここから、本書刊行には、前近代日本の対外戦争での活躍を喧伝し国威を宣揚するという意図があったことがわかる。本書は、「百世の下、人をして感奮興起せしむるの概」をあらしめるため、戦地に駐屯する各部隊や、傷病兵を収容する各病院に慰問品として贈られた。また、「内地」の諸学校にも寄贈され、修身歴史講話の材料とされている（緒言2頁）。本書所収の各論文が当時の日本史学界の一線級の研究者によって執筆され、その後の当該戦争研究に強い影響を与えたことを併せ考えれば、本書は当該戦争の研究・教育に関して重要な役割を担ったといえる。

本書に収められた各論文では、当該戦争の呼称として「文禄の役」が主に使用されている。この呼称が選ばれた理由については、本書所収の田中義成「豊太閤が外征の大目的を示したる文書」の次のような記述から推測することができる（52～53頁）。

……世に之を称して朝鮮征伐といへるは、啻に此役を小視せるのみならず、大に豊公の目的に違へり。何となれば、当時の文書記録等を見るに、当時、此役を総称せる場合には、みな唐入とあり、即ち支那征伐を意味せるなり。然るに之を朝鮮征伐といへるは、実際の戦局が朝鮮の域内に止まりしが故のみ。若し夫れ豊公の宿志は、区々たる朝鮮にあらず、支那四百余州を席卷し、天竺南蛮をも風靡せしめんと企てたるにて、朝鮮征伐は之が発程の初歩たるに過ぎざりしなり。

田中によれば、秀吉の目標は「区々たる朝鮮」ではなく「支那四百余州」および「天竺南蛮」であったため、当該戦争を「朝鮮征伐」と呼ぶことは、この戦争を引き起こした秀吉の意図を過小評価するものである、という。本書所収の岡田正之「文禄役に於ける我戦闘力」もまた、「豊公の眼中には四百余州なし、況て蕞爾たる朝鮮の半島をや。半島の征伐は豈に豊公が本意ならんや」（89頁）と述べており、秀吉の目標が「蕞爾たる朝鮮」ではなかったことを強調し

ている。

当該戦争を「朝鮮征伐」や「征韓」と称してしまつては、大陸征服をもくろむ秀吉の「雄大な志」を軽視することになり、国威宣揚を企図した本書の趣旨に合わない。とはいえ、日本軍は明の領土に足を踏み入れていないため、大陸征服を意味する呼称を使うこともできない。そこで選ばれたのが「文禄の役」という呼称であつたと考えられる。田中ひいては史学会がこの呼称を用いたのは秀吉の目的を重んじた結果といえる。

つづいて、韓国併合後に刊行された論著の検討に移ることにしよう。併合から4年後の1914年に刊行された池内宏『文禄慶長の役』正編第1（池内宏1914）は、当該戦争に関する初めての体系的かつ実証的な研究書として名高い²⁰。本書は日・朝・欧の史料を縦横に用い、当該戦争勃発までの過程について概述しており、後続の研究に甚大な影響を与えた。「文禄慶長の役」呼称の確立とその普及に、本書が決定的な役割を果たしたことは疑いないだろう。

それでは、池内はなぜ「文禄慶長の役」という呼称を使用したのだろうか。これについては同書内で言及されていないが、次に掲げた記述から池内の意図を垣間見ることができる（2～3頁）。

……此の戦役の当初に於ける秀吉の計画は、区々たる朝鮮の征服には非ずして、明国四百余州の席捲を目的としたるは、既に定説の存する所、今ま亦た之を疑ふ者なし。加之明国四百余州の併呑も、亦た其の終局の目的には非ずして、所謂天竺・南蛮にも及ばむとした……。

当該戦争における秀吉の征服目標が、「区々たる朝鮮」ではなく明、そして天竺・南蛮であつたと述べられている。先に見た田中義成とほぼ同様の口吻であることから、池内もまた秀吉の目的を重んじた結果、「文禄慶長の役」呼称を選んだと推測される。

本書は、「仮道入明」（道を朝鮮に借りて明に入る）の要請を拒否した朝鮮を罰するために秀吉が兵を出したという「朝鮮征伐」史観を批判し、秀吉の目的が大陸征服にあつたことを実証的に解き明かした研究書と評されている²¹。上の引用文に見られるように、池内が「朝鮮征伐」史観に批判的であつたことは間違いない。ただし、「朝鮮征伐」史観に対する批判が、当該戦争あるいは秀吉の目的に対する批判へと繋がるわけではない点に注意を払う必要がある。

本書は、南満州鉄道会社が設立した満鮮歴史地理調査部の研究成果の一つとして刊行された²²。同調査部は、東京帝国大学教授の白鳥庫吉が満鉄総裁の後藤新平を説得して創設された組織であるが、この研究事業を開始するにあたって白鳥が目指したのは、近代以降の「日本の大陸発展を肯定・支持し、学術の面からそれに貢献すること」（旗田巍1966、208頁）であつた。白鳥は本書の序で、当該戦争に関する研究成果は歴史学への寄与に止まるものではなく、大陸

²⁰ 南満洲鉄道株式会社の事業中止のため、本書正篇第2の刊行は頓挫したが、1936年、別篇（池内宏1936）が東洋文庫より刊行された。

²¹ 第1次日韓歴史共同委員会の討論において北島万次は、「……池内さんはいかにして朝鮮征伐じゃないかということを論証したんです。……池内先生は（秀吉の目的が学界で従来提唱されていた「朝鮮征伐」ではなく一引用者注）明征服であるということをはっきり出した」と発言している（鄭求福2005、512頁）。

²² 池内宏と同調査部の関係については、[井上直樹2019]に詳しい。

との交渉や植民地朝鮮の統治・経営などの参考に資するところがある、と述べている²³。こうした研究の背景を踏まえれば、池内が当該戦争や秀吉の大陸征服の目的を批判的に捉えようとしたとは考え難いと思われる。

池内は本書で、「秀吉の海外征服の意思は、時代の趨勢が偉大なる征服者としての彼れの頭脳を過ぎりて其の形を為したる特殊の意象に外ならず、……秀吉は曠古の英雄なり。曠古の英雄にして而して曠古の壮図を画す」(34～35頁)と述べ、秀吉を「偉大なる征服者」「曠古の英雄」として高く評価している。また、同書本文では「征鮮」という語を頻繁に使用している。以上の点を併せ考えれば、当該戦争の呼称について、池内が植民地の朝鮮人に「配慮」し、「朝鮮征伐」を避けて「文禄慶長の役」呼称を使用したと捉えることは困難である。

最後に、中村栄孝の一連の論著を見ていきたい。中村は、朝鮮総督府の編修官や教官などを歴任し、植民地朝鮮における教育行政や日本史教科書編纂に従事した人物である(三鬼清一郎2000、永島広紀2010)。研究史上では、戦前戦後を通じて多数の概説書(歴史教育研究会編1938、辻善之助ほか編1939、図説日本文化史大系編集事務局編1956、岡田章雄ほか編1959など)に関連論文を執筆した、当該戦争研究の第一人者と位置づけられている。中村は「内地」と朝鮮とを股に掛けて活動し、両地域の研究・教育に影響力を有していたため、ここでは「内地」を代表する研究者としても取りあげることにしたい。

中村は、1930年代に企画編集された第1期『岩波講座日本歴史』において、日朝関係をテーマとした3篇(「室町時代の日鮮関係」「文禄・慶長の役」「江戸時代の日鮮関係」)の執筆を担当している。その中の「文禄・慶長の役」では、当該戦争における秀吉の目的が次のように説明されている(中村栄孝1935、3頁)。

文禄・慶長の役は、豊臣秀吉晩年の一大壮挙である。国内統一の業を成就した秀吉は、遂に大陸経略の雄志を懷き、朝鮮半島に兵を出し、更に之を明にまでも進めようとしたのであつた。……またこの戦役によつて、わが武威は頗る宣揚せられ、且つ前代以来駭々乎として発展して已まなかつた国民海外渡航の趨勢は、愈々その刺戟を受けて、空前の盛況を見るに至つたのである。

当該戦争は、「大陸経略の雄志」を懷いた秀吉が、朝鮮半島へと兵を出し、さらに明へと進出しようとしたものと述べている。そして、この戦争によって、日本の武威が宣揚され、国民海外渡航の趨勢が盛況に至った、という。また別の論文で中村は、当該戦争の呼称として「朝鮮征伐」が不適当な理由を次のように記している(中村栄孝1939、253～255頁)。

(当該戦争は－引用者注) いふまでもなく不出世の英傑豊臣秀吉が、国内統一の業を成就したる後、更に進んで明国を征服し、遂には東洋を一体とする一大平和圏を建設し、以て大陸に皇化を普及せんとするの大理想の下に起した戦役である。……わが国に於いては本役を呼ぶに「豊太閤の朝鮮征伐」を以てするのを常としてゐたが、この称呼は必ずしも秀

²³「其の真相を探求して失敗の由来するところを闡明するは、啻に史学上の興味ある問題たるのみにあらず、又た東亜列国の国際関係と朝鮮人の国民性とを知了するに於いて絶好の資料を供給するものといふべく、特に半島が我が帝国の領土に入れる今日にありては、新附の民に対する綏撫の政策、此の地に於ける實際的経営、及び大陸に対する諸般の交渉、また皆な其の跡に鑑るところ無かるべからざるなり」(序2頁)。

吉の意図を十分に理解したものとは考へられない。秀吉の目的とした所は「唐入」にあり、而もこの戦役は、古く任那を中心とするわが大陸経営は別とし、明治時代の征戦を除けば、最も重要意義を有する大陸出兵であり、天智天皇の百濟御救援と共に、わが国家の名に於いて行はれた戦役で、決して秀吉が私兵を動かしたものとなすべきではないからである。

中村は、「不出世の英傑」秀吉が明を征服し、「東洋を一体とする一大平和圏」を建設せんとする理想のもと、当該戦争を引き起こしたと説く。そして、秀吉の征服目標が朝鮮ではなく大陸であった点、また当該戦争は日本の名において行われたもので、秀吉が私兵を動かしたのではなかった点を挙げ、「朝鮮征伐」という呼称が不適切であることを強調している。

このように、中村の論著では、秀吉の目的が大陸征服にあったことが繰り返し述べられている。一方で、植民地の朝鮮人への「配慮」のため「朝鮮征伐」や「征韓」呼称を避けるべきという主張は、管見の限り見出すことができない。中村が「文禄慶長の役」呼称を使用したのは、彼が朝鮮総督府官僚であることに加え、秀吉の目的に重きを置いていたためと推定される。

以上に見たように、史学会や池内宏らは、大陸征服こそが秀吉の真の目的であり、朝鮮侵攻はその端緒にすぎないという点を重視したことから、「朝鮮征伐」や「征韓」など、朝鮮・韓の入った呼称を避けたものと考えられる。また、日本は明の領土に進軍しておらず、「明征伐」や「征明」などの呼称も適当でないため、年号のみを用いた「文禄の役」あるいは「文禄慶長の役」呼称を選んだのだろう。大陸征服という秀吉の目的を重んじる思考の背景には、明治以降に盛んとなった、「海外雄飛の英雄」「偉大なる征服者」秀吉に対する顕彰の意識も窺われる²⁴。

1945年以前の研究者の論著には、当該戦争の呼称と植民地の朝鮮人の心情とを結びつけた議論をほとんど見出すことができない。現在のところ、筆者が確認できた事例は、「朝鮮征伐」呼称をめぐる新聞紙上での論争が唯一である。1933年11月、『東京朝日新聞』の読者投稿欄に掲載された、朝鮮在住の河村道器なる人物の文章を見てみよう（『東京朝日新聞』1933年11月12日3面、鉄箒欄）。

私は予てより「朝鮮征伐」などいふ言葉を不用意に使ふ人の多いのを憤慨してゐる者ですが、今度新潮社の『日本精神講座』中に、渡辺世祐博士の『豊太閤の朝鮮征伐』なる一篇が、あるのを見て、この感を深くする。／豊太閤の朝鮮侵略を『朝鮮征伐』と呼ぶ事は朝鮮同胞の甚だしく嫌ふ所である。それは無理ならぬ事であり、内鮮今日の関係に見ても、かういふ語を、たとへ學術的にでも、公然使用するの是不穩当な様に思ふ。この点、博士に御意見あらば拝聴致したい。／……『豊太閤が朝鮮を征伐した』などと不用意な言葉は慎んでもらはねばならない時世になつて居る。学者なら、學術的であるなら、他人の気持など考慮する必要は無いなどと、簡単に片づけられない重要性を有つた言葉であり、問題でもある。……

²⁴ 明治以降における秀吉顕彰の風潮については、[池田智文2008][高木博志2008][内田匠2018]など参照。なお[内田匠2018]は、大正時代中頃から昭和初期にかけて秀吉礼賛の雰囲気が一時的に退潮したと見るが(110～112頁)、実際には、当該時期にも秀吉を顕彰する論著が多数発表されているため、その主張には首肯しがたい。同時期には、秀吉に対する批判的な見解が発表されることもあった、と捉えるべきだろう。

河村は、布教のため朝鮮の各寺を歴住した曹洞宗の僧侶であり（梅田信隆監修1995、序文）、朝鮮仏教関連の論文を『青丘学叢』や『歴史と地理』などの学術雑誌に発表した研究者でもあった（河村道器1930・1931a・1931b）。

上の投稿文で河村は、新潮社刊行の『日本精神講座』に渡辺世祐の「豊太閤の朝鮮征伐」なる一篇が収録されているが、「朝鮮征伐」呼称は朝鮮人が非常に嫌悪するものであるため、こういった呼称を使用しないよう、渡辺および『日本精神講座』編集部に強く求めた。河村は朝鮮に長く在住しており、朝鮮人との関係も深かったため、こうした忠告に至ったのだろう。この投稿が掲載されてから数日後、渡辺と『日本精神講座』編集部から下のような応答が寄せられた（『東京朝日新聞』1933年11月15日3面、鉄箒欄）。二つの引用文の中、前者が渡辺、後者が編集部によるものである。

河村道器氏の「朝鮮征伐」などいふ言葉は、内鮮今日の関係から見て、不穩当のやうに思ふとの御意見、一応は御もつともである。成程、無暗に「朝鮮征伐」などいふ言葉を使用して、朝鮮同胞の反感を買ふことは面白くないが、「長州征伐」「会津征伐」「越後征伐」ともいふのであつて、「征伐」の字義に余り重点を置いて考へてもらつては困る。／元來、史實は史實としてこれを認め、精査研討を重ねて鬭争の由つて來るところ、及びその慘禍損失を知しつしてゐたゞき、かくの如き事件を再びくり返さぬやうにし、内鮮関係を一層強固なものにしたい、と思つてゐるのである。余り字義の末節にのみ拘泥してゐては、徹底的内鮮融和など到底望み得ない。／「征伐」でいけなければ、何とか適当な文字に改めるのもよいが、何と改めたところで、史實には大した變りがないはずである。

「豊太閤の朝鮮征伐」なる題目は編集部より提出したもので、渡辺博士の御選定ではありません。河村氏の御説の如く、或は朝鮮同胞には多少不愉快に響くかも知れませんが、慣用された語句ではあり、仮に、「征伐」を「侵略」とし、「侵入」とし、「外征」と改めたところで、結局同一事實であります。……この位の題目は止むを得ぬことではないでせうか。

渡辺は、東京帝国大学史料編纂官や明治大学教授を歴任し、日本史の教科書や概説書を多数執筆した研究者である。また、『日本精神講座』は、日本の国際連盟脱退を機に、「日本の皇道意識の下に日本学を創建」することを目的として編纂が開始されたシリーズ（全12巻）であった。

上の応答文に見るように、渡辺・『日本精神講座』編集部ともに、「朝鮮征伐」呼称への問題関心は非常に低い。統治政策上、朝鮮人の心情に対して敏感とならざるを得なかった植民地朝鮮とは異なり、「内地」の場合にはそのような意識が希薄であったといえる。韓国併合後、「内地」の研究者が執筆した論著に「朝鮮征伐」呼称が頻繁に使用されていることからわかるように、「内地」の研究者の間で、「同胞」となった朝鮮人への「配慮」から「朝鮮征伐」呼称を避けるという風潮があったとは考えがたいと思われる。

(3) 1945年以前の日本史教科書における当該戦争の呼称

当該戦争の呼称の普及に関して、日本史教科書も重要な役割を果たしたことは疑いないだろう。本節では、1945年以前の日本史教科書の記述で、当該戦争の呼称がいかに変化していったのかを窺うことにしたい。

まず、尋常小学校の日本史教科書から取りあげよう。尋常小学校の教科書に対しては、1886年以降、検定制が実施されたが、1904年から国定制に移行した。尋常小学校の国定日本史教科書は、1903年から1943年まで、6度（第1～6期）にわたって編纂刊行された。

国定日本史教科書における当該戦争の呼称を見てみれば、第1期教科書（1903年）の年表（巻2）に「朝鮮征伐」、第2期教科書（1910年）およびその改訂版（1911年）の見出し（巻2）に「朝鮮征伐」、第6期教科書（1943年）の本文・年表（下巻）に「朝鮮の役」が使用されている²⁵。一方、その間の第3・4・5期教科書では、「兵を朝鮮に出す」として当該戦争の概略が述べられているが、呼称については特に記されていない。初等教育という性格上、尋常小学校の日本史教科書に当該戦争の呼称を記載する必要性が低かったのかもしれない。ただ、学校教育の現場では「朝鮮征伐」呼称が一般的に使用されていたことが、次の事例から窺われる。

韓国併合から歳月が経ち、「内地」に居住する朝鮮人児童が次第に増加すると、そうした児童が在籍する尋常小学校の授業で当該戦争をいかに取り扱うかが問題となってきたようで、1937年、教育者関係雑誌の読者質問欄（応問）に「朝鮮征伐」の教授方法に関する相談が寄せられた（『研究評論歴史教育』11-12、1937年²⁶）。「朝鮮征伐の取扱について一朝鮮児童のゐる学級に於ける一」という相談に対し、回答者（東京文理科大学教育相談部）は次のように答えている。

「征伐」という語は不適當であるから直接使用しない方がよいと思う。ただ、「内地」においても、秀吉の「中国征伐」「九州征伐」「四国征伐」などという語があるが、それぞれの地方で歴史的事象として受け入れられ、問題なく使用されている。朝鮮はいまだ融和の過渡期であるため、「朝鮮を征伐した」という文句が朝鮮人の心証を害することはやむを得ない。当該戦争の顛末を詳細に究明し、その意義を力説することで、朝鮮人児童が「朝鮮征伐」を歴史的事象として受け入れるよう指導に努めてほしい、と。

回答者は「征伐」を不適當な語と指摘しつつも、当該戦争の経緯と意義を仔細に教授することにより、朝鮮人児童が「朝鮮征伐」を歴史的事象として捉えるようになり、「征伐」という語にも反感を持たなくなると考えているようである。このように、朝鮮人児童の増加により、「内地」の学校教育の現場でも「朝鮮征伐」の呼称やその取扱方法が問題視されることがあったが、当該戦争を詳細に教授することによって円満な解決が可能と捉えられていた。植民地朝鮮における学校教育の現場とは相当な距離があるといえる。

この事例で質問者・回答者ともに「朝鮮征伐」呼称を躊躇なく用いていることから推測すれば、「朝鮮の役」呼称が使用されるようになった第6期教科書刊行の時点（1943年）に至るまで、朝鮮人児童がいない尋常小学校の授業では「朝鮮征伐」呼称が用いられていた蓋然性が高い。1945年以降にも「朝鮮征伐」呼称が長らく命脈を保ったのは、この尋常小学校における教育も強く影響しているのではないと思われる。

次に、中学校の日本史教科書における当該戦争の呼称について見ていきたい。1945年以前、中学校の教科書に対しては基本的に検定制が実施されていた。1943年、国定制に変更されるが、戦局の悪化により国定教科書はほとんど使用されることがなかった²⁷。1945年までに刊行された中学校の日本史教科書は膨大な量に上るが、幸いなことに、国立教育政策研究所教育図書館

²⁵ 尋常小学校教科書については〔海後宗臣編1962・63〕所掲影印を参照した。

²⁶ 同誌12-5（1937年）にも同種の相談が見えるが、回答の趣旨はおおよそ同じである。

²⁷ 〔教科書研究センター編1984〕156～157頁。

が提供するウェブサイト「近代教科書デジタルアーカイブ」に多数の日本史教科書が掲載されている。そこで、同ウェブサイトに掲載されている1896年～1945年刊行の日本史教科書に基づいて、当該戦争の呼称を刊行年順に整理してみれば、【表4】のとおりである。

【表4】 中学校日本史教科書における当該戦争の呼称²⁸

刊行年	当該戦争の呼称	教科書名	編著者	出版社
1896	朝鮮征伐	中等教科日本史（巻2）	田中稻城、赤堀又二郎編	文学社
1897	朝鮮征伐	中等教科日本史（巻2、訂正再版）	田中稻城、赤堀又二郎編	文学社
1897	朝鮮征伐	皇国小史（訂正2版）	勝浦鞆雄編	吉川半七
1899	朝鮮征伐	中学日本史要（下巻）	山崎庚午太郎、大林徳太郎	明治書院
1900	征韓 *年表では「朝鮮征伐」	中等教科国史要	伊東尾四郎	富山房
1900	朝鮮征伐	中等教育日本小史（下巻）	伊東尾四郎	富山房
1900	朝鮮征伐	新編日本歴史（下巻）	本多浅治郎	内田老鶴圃
1901	朝鮮征伐	中等教科日本小史（下巻、訂正再版）	伊東尾四郎	富山房
1901	朝鮮征伐	新撰日本歴史	江東教育会校訂、高橋光正編	林盛林堂、魚住書店
1901	朝鮮征伐	国史綱（訂正3版）	勝浦鞆雄編	吉川半七
1902	朝鮮征伐	中等日本歴史（下巻、訂正再版）	沼田頼輔編	明治書院
1902	朝鮮征伐	国史教科書（下巻、訂正再版）	峰岸米造編	六盟館
1902	朝鮮征伐	中学国史（2年級用、訂正再版）	萩野由之	富山房
1903	朝鮮征伐	日本史要（下巻、訂正再版）	木寺柳次郎校訂、普通教育研究会編	水野書店
1903	朝鮮征伐	中学日本歴史教科書	大森金五郎	文学社
1904	朝鮮征伐	国史教科書（下巻、修正2版）	峰岸米造編	六盟館
1904	朝鮮征伐	中学校用国史教科書（下巻、修正3版）	有賀長雄	三省堂書店
1905	朝鮮征伐	日本史要（下巻、訂正再版）	史学界編輯所編	隆文館
1905	朝鮮征伐	中等日本歴史（巻下、訂正9版）	沼田頼輔編	明治書院
1905	朝鮮征伐	新編国史教科書（初級用巻下）	辻善之助	金港堂書籍
1906	海外遠征〔文禄の役、慶長再征の役〕	中等教科にほんれきし（下巻、訂正3版）	三上参次編	大日本図書
1906	豊臣秀吉の外征〔文禄の役、慶長の役〕	新訂日本歴史（訂正6版）	黑板勝美	吉川弘文館

²⁸ 煩瑣を避けるため、同年発行の教科書が複数存在する場合、各年3冊の例示に止めた。教科書の記述に個々の戦役名（「文禄の役」および「慶長の役」）が現れている場合、「当該戦争の呼称」の〔 〕内に記した。

1906	朝鮮征伐〔文禄の役、慶長の役〕	中等日本史（巻下、訂正再版）	藤岡継平	学海指針社
1907	豊臣秀吉の外征〔文禄の役、慶長の役〕	統合歴史教科書（日本史下、中学校用、訂正再版）	斎藤斐章	大日本図書
1907	朝鮮征伐	中等国史教科書（第2学年用、訂正再版）	原秀四郎編	博文館
1907	朝鮮征伐	参考綱目体日本歴史	馬上孝太郎編	目黒書店
1908	朝鮮征伐〔文禄の役、慶長の役〕	日本略史（下巻、修正4版）	峰岸米造編	六盟館
1908	朝鮮征伐	新訂中学国史（2年級用、訂正再版）	萩野由之	富山房
1908	朝鮮征伐〔文禄の征韓、再征〕	日本歴史（初級用巻2、訂正4版）	新保磐次	金港堂書籍
1909	朝鮮征伐〔文禄の役、慶長の役〕	日本小歴史（巻下、訂正再版）	笹川種郎編	内田老鶴圃
1910	朝鮮征伐〔文禄の役、慶長の役〕	中等日本歴史（下巻、訂正再版）	藤田明	宝文館
1910	征韓	日本歴史（上級用、訂正4版）	新保磐次	金港堂書籍
1910	征韓	上級用日本歴史	笹川種郎編	内田老鶴圃
1911	秀吉の外征	日本歴史教科書（下巻、修正再版）	大森金五郎	三省堂書店
1911	朝鮮征伐〔文禄の役、慶長の役〕	改訂中等日本歴史（下巻、訂正3版）	藤田明	宝文館
1911	朝鮮及び支那征伐〔文禄の役、慶長の役〕	新編国史教科書（初級用巻下、訂正6版）	辻善之助	金港堂書籍
1912	朝鮮征伐	新制中学国史（2年級用、訂正再版）	萩野由之	富山房
1912	豊臣秀吉の外征	新日本史（中学初級用下）	上原益蔵	啓成社
1912	朝鮮征伐〔文禄の役、慶長の役〕	中学日本史（初級用下巻）	依田喜一郎	同文館
1913	朝鮮征伐〔文禄の役、慶長の役〕	新編日本史教科書（巻下、訂正改版）	笹川種郎	内田老鶴圃
1913	朝鮮征伐	新訂日本歴史教科書（下巻、修正4版）	大森金五郎	三省堂書店
1913	朝鮮征伐	新編日本歴史教科書（下巻、修正再版）	渡辺世祐	三省堂書店
1916	文禄・慶長の両役	日本歴史（上級用、改訂）	峰岸米造編	六盟館
1916	朝鮮征伐	中等日本史（上級用、訂正再版）	藤田明	宝文館
1917	朝鮮征伐〔文禄の役、慶長の役〕	中等日本史（下巻、訂正6版）	藤田明編、田中義成増訂	宝文館
1917	朝鮮征伐	新編日本歴史教科書（下巻、修正5版）	渡辺世祐	三省堂
1917	朝鮮征伐〔文禄の役、慶長の役〕	中学校用日本歴史教科書（下巻）	三省堂編輯所編	三省堂
1920	朝鮮及支那征伐〔文禄の役、慶長の役〕	重修新編国史教科書（初級用巻下、訂正14版）	辻善之助	金港堂書籍

1920	朝鮮・支那の征伐 *年表では「朝鮮 征伐」	重修新編国史教科書（上級用、訂正14版）	辻善之助	金港堂書籍
1921	秀吉の征伐 *年 表では「文禄の 役」「慶長の役」	中学校用日本歴史教科書（上級用、修正3版）	三省堂編輯所編	三省堂
1921	朝鮮征伐〔文禄の 役、慶長の役〕	中学日本歴史（下巻、新訂再版）	芝葛盛	明治書院
1922	朝鮮及び支那征伐 *年表では「朝鮮 征伐」	新編国史教科書（上級用、訂正16版）	辻善之助	金港堂書籍
1923	朝鮮征伐〔文禄の 役、慶長の役〕	中等日本史（下巻、訂正8版）	藤田明編、和田英 松修訂	東京宝文館
1923	朝鮮征伐〔文禄の 役、慶長の役〕	新体日本歴史（第2学年用、訂正再版）	八代国治	富山房
1924	朝鮮・支那の征伐	中学日本歴史（上級用、新訂）	芝葛盛	明治書院
1924	文禄・慶長の両役	中学校用日本歴史教科書（上級用）	峰岸米造編	六盟館
1925	朝鮮征伐〔文禄の 役、慶長の役〕	新定日本歴史（第2学年用、三訂）	幸田成友	富山房
1925	朝鮮征伐〔文禄の 役、慶長の役〕	新体日本歴史（第2学年用、改訂）	八代国治著、三上 参次訂補	富山房
1925	朝鮮征伐〔文禄の 役、慶長の役〕	中学日本歴史（下巻、重修）	芝葛盛	明治書院
1926	文禄・慶長の役 *年表では「朝鮮 征伐」	中学校用最新国史（巻の下、訂正）	峯岸米造	六盟館
1926	朝鮮征伐〔文禄の 役、慶長の役〕	中等教科新編日本史（下巻）	文献書院編輯部編	文献書院
1926	文禄・慶長の両役	中等日本史（第5学年用）	斎藤斐章、中川一 男	大日本図書
1927	朝鮮戦役〔文禄の 役、慶長の役〕 *年表では「朝鮮 征伐」	中等教科日本歴史教科書（下巻、修正9版）	三省堂編輯所編	三省堂
1927	文禄・慶長の役	中等国史（下巻）	藤懸静也	東京開成館
1927	朝鮮征伐〔文禄の 役、慶長の役〕	新編中学国史（下巻）	芝葛盛	明治書院
1929	朝鮮征伐〔文禄の 役、慶長の役〕	中学日本歴史教科書（下巻）	藤井甚太郎	瞭文堂
1931	朝鮮の役 *年表 では「文禄の役」 「慶長の役」	中学総合日本史（甲表準據上級用）	栗田元次	中文館
1932	文禄・慶長の役	新定日本史（甲表準據第1学年用）	三省堂編輯所編	三省堂
1932	朝鮮征伐〔文禄の 役、慶長の役〕	新制中等国史（甲表準據1学年用）	龍肅	至文堂

1932	文禄・慶長の役	新撰日本歴史（甲表準據初級用）	幸田成友	富山房
1933	朝鮮役〔文禄の役、慶長の役〕	新修日本史（甲表準據第1学年用）	魚澄惣五郎	星野書店
1933	朝鮮征伐〔文禄の役、慶長の役〕	新体国史教科書（甲表準據第1学年用、修正3版）	大森金五郎	三省堂
1933	朝鮮の役〔文禄の役、慶長の役〕	中学総合日本史（甲表準據初級用）	栗田元次	中文館
1934	文禄の役、慶長の役	中学新国史（甲要目第1学年用、修正3版）	三浦周行著、松本彦次郎補訂	東京開成館
1934	文禄慶長の役	帝国小史（甲号準拠上級用）	井野辺茂雄	中文館
1934	朝鮮戦役〔文禄の役、慶長の役〕	新定日本史（甲表準拠第1学年用、修正3版）	三省堂編輯所編	三省堂
1935	文禄・慶長の役	新体皇国史（甲表準拠第1学年用）	板沢武雄	盛林堂書店
1935	文禄・慶長の役	中学国史通記（甲表準據上級用前編）	西田直二郎	積善館
1936	文禄・慶長の役	改訂新撰日本歴史（甲表初級用、訂正3版）	幸田成友	富山房
1936	朝鮮の役〔文禄の役、慶長の役〕	新編国史（甲表準據前編、訂正再版）	辻善之助	金港堂書籍
1936	朝鮮征伐〔文禄の役、慶長の役〕	新体日本歴史（甲表1年用、訂正11版）	八代国治著、三上参次訂補	富山房
1937	文禄・慶長の役	新撰国史（初級用）	歴史研究会	修文館
1937	文禄の役、慶長の役 *年表では「朝鮮征伐」	新体日本歴史（1年用、訂正13版）	八代国治著、三上参次訂補	富山房
1937	朝鮮戦役〔文禄の役、慶長の役〕	中学国史教科書（第1学年用）	三省堂編輯所編	三省堂
1938	文禄・慶長の役	新修日本史（初年級用、訂正再版）	魚澄惣五郎	星野書店
1938	文禄・慶長の役	新修帝国小史（高級用下巻）	井野辺茂雄	中文館書店
1938	文禄・慶長の役	中学国史通記（上級用後編）	西田直二郎	積善館
1939	朝鮮役	新制中学国史（初級用、訂正）	渡辺世祐	六盟館
1939	朝鮮の役〔文禄の役、慶長の役〕	新体中学総合国史（初級用、修正）	栗田元次	中文館書店
1939	文禄・慶長の役	新撰日本歴史（中学校初級用）	幸田成友	富山房
1941	朝鮮征伐〔文禄の役、慶長の役〕	新日本歴史（中学校初学年用、訂正4版）	龍肅	至文堂
1941	朝鮮征伐	新日本歴史（中学校上級用下巻、訂正4版）	龍肅	至文堂
1941	文禄の役、慶長の役	中学国史要（初級用、訂正再版）	清原貞雄	東京修文館
1943	文禄・慶長の役	新制中学国史（上級用下巻、修正）	渡辺世祐	中等学校教科書
1943	文禄・慶長役	新体皇国史（新制版、中学校上級用、修正5版）	板沢武雄	中等学校教科書
1943	朝鮮征伐	新日本歴史（中学校上級用下巻、修正5版）	龍肅	至文堂

1945	証明 *年表では「文禄の役」「慶長の役」	歴史（皇国篇）	中等学校教科書	中等学校教科書
------	----------------------	---------	---------	---------

本表によれば、当該戦争の呼称として、1920年代までは基本的に「朝鮮征伐」が使用されていたが、1930年前後から「文禄慶長の役」が増加するようになっていくことがわかる。

この変化の要因の一つとして、文部省制定の「中学校教授要目」（以下、「要目」と称す）が改正されたことが挙げられる。要目は、学校教育における教授事項の基準を示したものであり、その内容は教科書の記述にも反映された²⁹。要目が初めて制定されたのは1902年2月のことであり、日本歴史の第1学年教授事項として「朝鮮征伐」が立項されている（『官報』明治35年2月6日）。その後、1911年7月に要目が改正され、日本歴史の第1学年教授事項として「豊臣秀吉ノ朝鮮征伐」が立項された（『官報』明治44年7月31日）。1931年2月、要目が再び改正されたが、このとき教授事項から当該戦争の項目が消滅している（『官報』昭和6年2月7日）。もちろん、これ以降も当該戦争の教授自体は行われているが³⁰、単独の教授事項として要目に立項されることがなくなったのである。すなわち、1931年の改正によって要目から「朝鮮征伐」の語が消滅したため、この呼称を教科書で強いて用いる必要がなくなったものと推定される。

また、中学校の歴史教育に関する近年の研究では、日本史教科書の歴史叙述について、次のような指摘がなされている（角田将士2010、89～148頁）。1920年代以前の教科書では、「異民族」（朝鮮人・台湾人・琉球人・蝦夷・熊襲など）は「征伐支配」の対象として叙述されていた。しかし、1930年代以降、日本の植民地同化政策の推進にともない、教科書の記述で「異民族」が「平定同化」の対象へと解釈修正される傾向が現れるようになった。この解釈修正は、日本の武力による異民族支配の実態を忘却させ、「日本が異民族を穏やかに同化することで形成されてきたという記憶」を学生に植え付けようとしたものであった、という。こうした中学校教科書の叙述の変化は文部省の意向を受けてのものと思われるが、各教科書が「朝鮮征伐」呼称の使用を避けることにも影響した可能性がある。

ただ、【表4】から見て取れるように、1930年代以降も、「朝鮮征伐」や「朝鮮役」などの呼称は依然として中学校の日本史教科書に使用されている。したがって、文部省が「朝鮮征伐」呼称を禁止したり「文禄慶長の役」呼称を強制したりしたわけではないことは明らかである。検定制度下の教科書に関しては、当該戦争の呼称の選択は各執筆者の判断に委ねられており、その結果として、当時、学界で広まりつつあった「文禄慶長の役」呼称が多く選ばれることになったのではないだろうか。当時の文部省が当該戦争の呼称の使用に関していかなる方針を持っていたのかという点については、現在のところ、詳細が不明である。今後の課題としたい。

²⁹ 1902年の教授要目の制定にともない、「教科書の目的や記述すべき諸要目を、その時々「中学校教授要目」が指定するようになった」（岡崎勝世2018、35頁）という。

³⁰ 1931年の改正により、要目は教材配列の方法にしたがって甲案・乙案の二通りに分かれ、これ以降、当該戦争は下記の事項などで取り扱われるようになった。「織田豊臣時代ノ外交ト文化」（甲案第1学年）、「国民ノ海外発展ト西洋文化」（甲案第4学年）、「西洋人ノ渡来ト西洋文化ノ輸入」（乙案第3学年）、「織田豊臣二氏ノ統一ト其ノ時代ノ文化」（乙案第4学年）、「国民ノ海外発展 西洋文化ノ輸入」（乙案第5学年）。また、1937年の再度の改正以降には、「安土桃山時代」、「邦人ノ海外発展ト西洋文化ノ伝来」の事項で取り扱われた（『官報』昭和12年3月27日）。

おわりに

本稿では、1945年以前の日本において、「文禄慶長の役」呼称が普及することになった経緯と要因について検討を加えた。

1910年の韓国併合後、朝鮮総督府関係者の手になる研究・教育分野の著作では、当該戦争の呼称として「朝鮮征伐」や「征韓」を使用することは極力避けられていた。こうした呼称が朝鮮人の心情を刺激し、「内鮮融和」の障害となることを危惧したものと思われる。それらの呼称の代わりに主として使用されたのが「文禄慶長の役」呼称であった。

一方、「内地」の研究・教育分野では「朝鮮征伐」呼称が頻繁に使用されていた。田中義成をはじめとする史学会の面々や池内宏など、当該戦争研究をリードした研究者は「文禄の役」や「文禄慶長の役」呼称を用いたが、大陸征服こそが秀吉の目的であったことから朝鮮・韓の入った呼称を避けたと考えられる。とはいえ、日本軍は明に兵を進めておらず、「明征伐」や「征明」などの呼称も不適当なため、年号のみの呼称を選んだのだろう。呼称選択の背景には「海外雄飛の英雄」秀吉に対する顕彰の意識も窺われる。また、「内地」の研究者の論著には、当該戦争の呼称と植民地の朝鮮人の心情とを結びつけた記述をほとんど見出すことができない。以上のことから、「内地」の研究者の間で、韓国併合を契機とし、朝鮮人の心情に「配慮」して「文禄慶長の役」呼称（あるいはそれに類する呼称）を使用しようとする風潮があったと見る先行学説に賛同することはできない。

当該戦争の呼称の普及には、日本史教科書も重要な役割を果たしたといえるだろう。「内地」の尋常小学校の日本史教科書では、第1期教科書（1903年）から第2期教科書改訂版（1911年）で「朝鮮征伐」、第6期教科書（1943年）で「朝鮮の役」という呼称が見える。第3期から第5期の教科書には当該戦争の呼称が記載されていないが、学校教育の現場では「朝鮮征伐」呼称が一般的に使用されていたのではないかと考えられる。一方、中学校の日本史教科書では、当該戦争の呼称として「朝鮮征伐」が主に使用されていたが、教授要目の改正や、「異民族」に関する叙述の変化にともない、1930年代以降、「文禄慶長の役」の使用が徐々に増加していったと思われる。ただし、「朝鮮征伐」や「朝鮮役」という呼称も依然として使用されていることからわかるように、文部省が「文禄慶長の役」呼称の使用を強制したわけではなかった。当該戦争の呼称選択は各教科書の執筆者の裁量に委ねられていたのではないかと推定されるが、この点については不明な点が多い。今後の課題としたい。

参考文献

- 荒木和憲2019「『壬辰戦争』の講和交渉」『SGRA レポート』86
- 有馬成甫1942『朝鮮役水軍史』海と空社
- 有馬寛1936『新興日本の国防』海軍篇、日本青年館
- 池享編2003『日本の時代史13 天下統一と朝鮮侵略』吉川弘文館
- 池内宏1914『文禄慶長の役』正編第1、南満洲鉄道株式会社
- 池内宏1936『文禄慶長の役』別編第1、東洋文庫
- 池田智文2008「近代日本の豊臣秀吉認識—「皇国史観」の＜帝国日本意識＞の問題として—」『教育のプリズム ノートルダム教育』7
- 石原道博1963『文禄・慶長の役』塙書房
- 稲葉岩吉1925『朝鮮文化史研究』雄山閣

- 稲葉岩吉・矢田仁一1935『世界歴史大系11 朝鮮・満洲史』平凡社
- 井上直樹2019「池内宏の満鮮史研究—『後藤新平文書』・アジア歴史資料センター所蔵文書の分析を中心に—」『京都府立大学学術報告（人文）』71
- 今西龍1935『朝鮮史の栞』近沢書店
- 内田匠2018「近代日本における豊臣秀吉観の変遷」『政治学研究（慶應義塾大学法学部政治学
科ゼミナール委員会）』59
- 梅田信隆監修1995『河村道器和尚遺稿 朝鮮仏教史 資料編』1、椋伽林
- 太田秀春2001「文禄・慶長の役における日本軍の築城観の変遷について—朝鮮邑城の利用から
倭城築城への過程を中心に—」『朝鮮学報』181
- 太田秀春2002「軍部による文禄・慶長の役の城郭研究」『軍事史学』150
- 太田秀春2006『朝鮮の役と日朝城郭史の研究—異文化の遭遇・受容・変容—』清文堂
- 太田秀春2008『近代の古蹟空間と日朝関係—倭城・顕彰・地域社会—』清文堂
- 太田秀春2010「前近代の日韓関係と対外戦争—「朝鮮の役」の諸問題—」『日韓歴史共同研究
報告書』第2期教科書グループ篇、日韓歴史共同研究委員会
- 大野晃嗣2019「明朝と豊臣政権交渉の一齣—明朝兵部発給「劄付」が語るもの—」『東洋史研究』
78-2
- 大原利武1929『朝鮮史要』朝鮮史学会
- 岡崎勝世2018「日本における世界史教育の歴史（Ⅱ-1）—三分科制の時代1—」『埼玉大学紀
要（教養学部）』53-2
- 岡田章雄ほか編1959『日本の歴史7 天下統一』読売新聞社
- 小田省吾1931『朝鮮小史』魯庵記念財団
- 海後宗臣編1962・63『日本教科書大系 近代編』第19・20巻、講談社
- 角田将士2010『戦前日本における歴史教育内容編成に関する史的研究—自国史と外国史の関連
を視点として—』風間書房
- 川上多助1940『日本歴史概説』下、岩波書店
- 河村道器1930「高麗大覚国師義天に関する研究概説（第1回）」『歴史と地理』26-3
- 河村道器1931a「大覚国師集の異版に就て」『青丘学叢』4
- 河村道器1931b「義天藏演義鈔板の日本将来に就て」『青丘学叢』6
- 北川清之助1936『普通学校国史解説』下巻、共盛堂出版部
- 北島万次1990「豊臣政権の朝鮮侵略に関する学説史的検討」『豊臣政権の対外認識と朝鮮侵略』
校倉書房
- 北島万次2002『秀吉の朝鮮侵略』山川出版社
- 北島万次2005「壬辰倭乱と民衆—降倭についてのひとつの視点—」『朝鮮史研究会論文集』43
- 北島万次2009「壬辰倭乱における二つの和議条件とその風聞」『日朝交流と相克の歴史』校倉
書房
- 北島万次2012『秀吉の朝鮮侵略と民衆』岩波書店
- 北島万次2017『豊臣秀吉朝鮮侵略関係史料集成』第1～3巻、平凡社
- 木下真弘1893『豊太閤征外新史』巻1～5、青山堂
- 君島和彦2020「壬辰戦争と景福宮」『日韓相互認識』10
- 木村可奈子2010「明の対外政策と冊封国暹羅—万暦朝鮮役における借暹羅兵論を手掛かりに—」
『東洋学報』92-3

- 教科書研究センター編1984『旧制中等学校教科内容の変遷』ぎょうせい
- 久芳崇2010『東アジアの兵器革命—十六世紀中国に渡った日本の鉄砲—』吉川弘文館
- 黒田慶一編2004『韓国の倭城と壬辰倭乱』岩田書院
- 桑野栄治2010「東アジア世界と文禄・慶長の役—朝鮮・琉球・日本における対明外交儀礼の観点から—」『日韓歴史共同研究報告書』第2期第2分科会篇、日韓歴史共同研究委員会
- 佐伯有清1976「横井忠直と『高麗古碑本之来由』の出現」『広開土王碑と参謀本部』吉川弘文館
- 佐島顕子2013「文禄役講和の裏側」『偽りの秀吉像を打ち壊す』柏書房
- 佐島顕子2016「老いた秀吉の誇大妄想が、朝鮮出兵を引き起こしたのか」『戦国史の俗説を覆す』柏書房
- 佐藤義亮編1934『日本精神講座』第6巻、新潮社
- 参謀本部編1924『日本戦史 朝鮮役』偕行社
- 史学会編1905『弘安文禄征戦偉績』史学会
- 重野安繹・久米邦武・星野恒1890『稿本国史眼』大成館
- 末松保和編1970『朝鮮研究文献目録1868-1945』単行書篇（上）、東京大学東洋文化研究所附属東洋学文献センター
- 末松保和編1972『朝鮮研究文献目録1868-1945』論文・記事篇（Ⅰ）、東京大学東洋文化研究所附属東洋学文献センター
- 菅野銀八1925「朝鮮史関係図書解題」『朝鮮史講座』特別講義、朝鮮史学会
- 杉村勇次郎1922『軍事的批判豊太閤朝鮮役』日本学術普及会
- 鈴木開2011「丁応泰の変と朝鮮—丁酉倭乱期における朝明関係の一局面—」『朝鮮学報』219
- 図説日本文化史大系編集事務局編1956『図説日本文化史大系 8 安土桃山時代』小学館
- 清家彩果1912「朝鮮征伐に関する朝鮮の伝説」『朝鮮及満洲』70
- 瀬野馬熊1927『朝鮮史大系』近世史、朝鮮史学会
- 曾根勇二2004『近世国家の形成と戦争体制』校倉書房
- 高木博志2008「近代日本と豊臣秀吉」『壬辰戦争—16世紀日・朝・中の国際戦争—』明石書店
- 高橋亨2015「朝鮮出兵前後の明代中国における日本認識—『日本考』と『続文献通考』の記述を焦点として—」『米沢史学』31
- 田中久夫1943『新講大日本史 5 室町安土桃山時代史』雄山閣
- 田中義成1925『豊臣時代史』明治書院
- 谷信次1903『海の大日本史』上巻、大学館
- ダブルユー＝ジー＝アストン1907（増田藤之助訳）『英和对訳豊太閤征韓史』隆文館
- 朝鮮総督府編1914『外国歴史教科書』朝鮮総督府
- 朝鮮総督府編1921『尋常小学国史補充教材 児童用』巻2、朝鮮総督府
- 朝鮮総督府編1922『普通学校国史』下巻、朝鮮総督府
- 朝鮮総督府編1933『普通学校国史』巻2、朝鮮総督府
- 朝鮮総督府編1936『朝鮮史のしるべ』朝鮮総督府
- 朝鮮総督府編1938『初等国史』巻2、朝鮮総督府
- 朝鮮総督府編1939『国史地理』上巻、朝鮮総督府（改訂翻刻、初版は1938年）
- 朝鮮総督府編1941『初等国史』第6学年用、朝鮮総督府
- 朝鮮総督府編1942『中等国史』低学年用、朝鮮総督府

- 朝鮮総督府編1944『初等国史』第6学年用、朝鮮総督府
- 朝鮮総督府内務部学務局1910『旧学部編纂普通学校用教科書並ニ旧学部検定及認可ノ教科用図書ニ関スル教授上ノ注意并ニ字句訂正表』朝鮮総督府
- 辻善之助1917『海外交通史話』東亜堂書房
- 辻善之助ほか編1939『大日本戦史』第3巻、三教書院
- 津野倫明2002「文禄・慶長の役における毛利吉成の動向」『人文科学研究（高知大学）』9
- 津野倫明2007「朝鮮出兵と西国大名」『前近代の日本列島と朝鮮半島』山川出版社
- 津野倫明2014「朝鮮出兵の原因・目的・影響に関する覚書」『戦争と平和』竹林舎
- 津野倫明2018：「朝鮮出兵期の長宗我部領国における造船と法制」『戦国大名の土木事業—中世日本の「インフラ」整備—』戎光祥出版
- 津野倫明2020「文禄・慶長の役」『中世史講義【戦乱篇】』筑摩書房
- 帝都日日新聞社編1940『皇国二千六百年史講話』帝都日日新聞社
- 徳富猪一郎1921・22『近世日本国民史 朝鮮役』上・中・下巻、民友社
- 仲尾宏2000『朝鮮通信使と壬辰倭乱一日朝関係史論—』明石書店
- 永島広紀2010「朝鮮総督府学務局による歴史教科書編纂と「国史／朝鮮史」教育—小田省吾から中村栄孝、そして中垣篤へ—」『日韓歴史共同研究報告書』第2期教科書小グループ篇、日韓歴史共同研究委員会
- 中野等2006『秀吉の軍令と大陸侵攻』吉川弘文館
- 中野等2008『戦争の日本史16 文禄・慶長の役』吉川弘文館
- 中野等2010a「山鹿素行における「文禄・慶長の役」の語られ方—近世通信使外交の裏側—」『グローバル時代の朝鮮通信使研究—海峡あれど国境なし—』花書院
- 中野等2010b「文禄・慶長の役研究の学説史的検討」『日韓歴史共同研究報告書』第2期第2分科会篇、日韓歴史共同研究委員会
- 中野等2014a「唐入り（文禄の役）における加藤清正の動向」『加藤清正』戎光祥出版（初出2013年）
- 中野等2014b「昭和戦前期にいたる「朝鮮出兵」関係文献目録（稿）」『九州文化史研究所紀要』57
- 中野等2020「文禄・慶長の役と諸大名の動向（一）—『鹿児島県史料 旧記雑録』からみた当該期の島津家—」『佐賀県立名護屋城博物館研究紀要』26
- 中野等2021「文禄・慶長の役と諸大名の動向（二）—文禄の役および講和交渉期における毛利一門の動向—」『佐賀県立名護屋城博物館研究紀要』27
- 中村栄孝1935『岩波講座日本歴史 文禄・慶長の役』、岩波書店
- 中村栄孝1939「文禄・慶長の役」『大日本戦史』第3巻、三教書院
- 長森美信2020「壬辰・丁酉（文禄・慶長）乱における朝鮮被擄人の日本定住—朝鮮人キリシタンを中心に—」『天理大学学报』253
- 貫井正之2010『豊臣・徳川時代と朝鮮—戦争そして通信の時代へ—』明石書店
- 萩野由之1920『日本史講話』下、明治書院
- 荷見守義2006「ヌルハチ助兵の謎—文禄・慶長の役との関係をめぐって—」『国史研究（弘前大学）』120
- 荷見守義2019「監軍陳效と「万暦朝鮮の役」—監察領域を中心に—」『人文社会科学論叢（弘前大学）』6

- 旗田巍1966「日本における東洋史学の伝統」『歴史像再構成の課題—歴史学の方法とアジア—』御茶の水書房
- 服部徹1894『日韓交通史』博聞社
- 花見朔巳1929『綜合日本史大系8 安土桃山時代史』内外書籍
- 日笠護1930『日鮮関係の史的考察と其の研究』四海書房
- 平川新2018『戦国日本と大航海時代—秀吉・家康・政宗の外交戦略—』中央公論新社
- 深谷克己2011「イベリア・インパクトと壬辰戦争」『「韓国併合」100年を問う 2010年国際シンポジウム』岩波書店
- 北豊山人1894『文禄慶長朝鮮役』博聞社
- 洞富雄1939『鉄砲伝来記』白揚社
- 堀新2010『日本中世の歴史7 天下統一から鎖国へ』吉川弘文館
- 堀新2019「豊臣秀吉の「唐入り」構想—その成立・表明と現実化—」『立正史学』125
- 松本愛重編1894『豊太閤征韓秘録』第1集、成歆社
- 三浦周行1930『日本史の研究』第2輯、岩波書店
- 三鬼清一郎2000「朝鮮役研究史の一齣—中村栄孝氏の業績をめぐって—」『織豊期の政治構造』吉川弘文館
- 三鬼清一郎2012『豊臣政権の法と朝鮮出兵』青史出版
- 三国谷三四郎校閲・日韓書房編集部編1913『新撰大日本帝国史略』日韓書房
- 光成準治2020『列島の戦国史9 天下人の誕生と戦国の終焉』吉川弘文館
- 宮崎五十騎1937『概観朝鮮史』四海書房
- 村井章介2013「壬辰倭乱の歴史的前提—日朝関係史における—」『日本中世の異文化接触』東京大学出版会（初出1999年）
- 森田芳夫1987『韓国における国語・国史教育—朝鮮王朝期・日本統治期・解放後—』原書房
- 文部省編1943『国史概説』下、内閣印刷局
- 山内民博2003「倭乱記録と顕彰・祭祀—壬辰丁酉倭乱と朝鮮郷村社会—」『新潟史学』50
- 雄山閣編輯局編1932『異説日本史12下 戦争篇下』雄山閣
- 米谷均2005「朝鮮侵略前夜の日本情報」『日韓歴史共同研究報告書』第1期第2分科篇、日韓歴史共同研究委員会
- 米谷均2008「朝鮮侵略後における被虜人の本国送還について」『壬辰戦争—16世紀日・朝・中の国際戦争—』明石書店
- 米谷均2016「文禄・慶長の役／壬辰戦争の原因 実像編」『秀吉の虚像と実像』笠間書院
- 歴史教育研究会編1938『戦争と文化』四海書房
- 六反田豊2005「文禄・慶長の役（壬辰倭乱）開戦初期における朝鮮側の軍糧調達とその輸送」『日韓歴史共同研究報告書』第1期第2分科篇、日韓歴史共同研究委員会
- 六反田豊ほか2005「文禄・慶長の役（壬辰倭乱）」『日韓歴史共同研究報告書』第1期第2分科篇、日韓歴史共同研究委員会
- 渡部学・阿部洋編1990『日本植民地教育政策史料集成（朝鮮篇）』第18巻、龍溪書舎
- 金文子1999「임진왜란에 대한 일본의 시각 변천」『역사비평』46
- 李啓煌2014「朝鮮から見た文禄・慶長の役」『岩波講座日本歴史10 近世Ⅰ』岩波書店
- 張信編2005『朝鮮総督府教科書叢書（歴史篇）』第1～7巻、청운

鄭求福2005「壬辰倭乱の歴史的意味—壬辰倭乱に対する韓・日両国の歴史認識—」『日韓歴史共同研究報告書』第1期第2分科篇、日韓歴史共同研究委員会

顧明源2020「壬辰戦争における佐賀の従軍僧是琢明琳について」『九州史学』185

張子平2016「文禄役中の「援朝経略」宋応昌出身についての一考察—文集と方志史料を手掛に—」『人文研究（神奈川大学人文学会）』188

鄭潔西2008「万曆朝鮮役により明軍に編入された日本兵」『東アジア文化環流』1-2

鄭潔西2009「万曆時期に日本の朝鮮侵略軍に編入された明朝人」『東アジア文化交渉研究』2

国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/>

国立教育政策研究所教育図書館 近代教科書デジタルアーカイブ <https://www.nier.go.jp/library/textbooks/>

附記：本稿は、科研費若手研究（19K13365）、東京大学史料編纂所一般共同研究、東京大学附属図書館アジア研究図書館上廣倫理財団寄付研究部門協働型アジア研究に基づく研究成果の一部である。

A Reconsideration of the Name “Bunroku Keicho no Eki”

KAWANISHI Yuya

The phrase “Bunroku Keicho no Eki” (the warfare in the Bunroku and Keicho periods) is most common in Japanese historians’ community to refer to the series of invasions of Korea by Toyotomi Hideyoshi in the late 16th century (hereinafter called the “Wars”), although the event is known by many different names as well. An earlier study insists that the previously often used phrase “Chosen Seibatsu” (the Korea conquest) was replaced by the description “Bunroku Keicho no Eki” as a widely accepted name out of “consideration” for the feelings of Koreans who became Japan’s “fellow” citizens after Japanese annexation of Korea 1910. However, no sufficient evidence has been provided to support the argument, meaning the preceding survey should be re-examined. With that in mind, how and why the name “Bunroku Keicho no Eki” became common in Japan’s fields of research and education before 1945 are examined in this paper.

In Chapter 1, how the Wars are described in publications penned by personnel connected to the Government-General of Korea is analyzed, revealing that the words “Chosen Seibatsu” do not appear in them while such expressions as “Bunroku Keicho no Eki” and “Jinshin Ran” (the war in the Jinshin period) are used instead. This likely is a result of “consideration” for Koreans’ feelings.

Chapter 2 features the results of an analysis of the Wars’ descriptions in books of researchers on the “Japanese mainland.” The findings show the name “Bunroku no Eki” and other such phrases were adopted on the “Japanese mainland” even before the Korean annexation. Researchers on the “Japanese mainland” likely selected the phrase “Bunroku Keicho no Eki” and other similar names not due to their “consideration” for Koreans but in an attempt to emphasize Hideyoshi’s ultimate goal of dominating the Chinese continent. In the process of the names of the Wars spreading, textbooks also played an important role, and the words “Chosen Seibatsu” was most typical to refer to the Wars in Japanese history textbooks for use at junior high schools. While the Wars gradually started to be called “Bunroku Keicho no Eki” more often from the 1930s, the phrase “Chosen Seibatsu” continued to be used until 1945.

Based on the findings above, it is concluded that the earlier study’s argument that the name “Chosen Seibatsu” was replaced by the expression “Bunroku Keicho no Eki” on the “Japanese mainland” at the time of the Korean annexation cannot be supported. The phenomenon where the Wars were referred to differently from previously out of “consideration” for Koreans’ feelings, was limited to Korea under Japanese colonial rule.